

## 森の言葉

クワールレンが竜人スエデンと会ってより、ひと月と半分が過ぎた。あれからシルレイヤの森に近づいたのは二回ほどで、いずれもエネルギーとともに訪れたが、竜人に会うことはなかった。ミニユメにも遭遇しなかった。彼女は北熊学舎にあらわれることもなく、日に日にやってくるのは、暑さと萌え出る若葉だった。

景色は、深みのある緑にたちまち覆われた。雪の降った花の季節を、まるでなかったことにするように。3015番地の丘は、温まった土と湿った若葉の匂いを運ぶ風の通り道になった。青の真ん中山はさらに深みをもった青になり、村の家々は、勢いを増していく太陽の光を浴びて、力強く輝いた。気づけば汗の滲む額とは裏腹に、シルレイヤの森や魔導師の木を隠す松の森は、さらに冷たい影を抱いた。

だが、陽の月（七月）の半ば、クワールレンたちは、冷や汗をかくことになった。見習い最初の学力試験が行われたのだ。背後には追試というものが控えていて、みんなはそいつに襲われないよう、必死になって勉強した。

結局、追試を受けたのは、3015番地の中でチャルーだけだった。しかし、彼はけろりとして、次のお楽しみのことしか考えていなかった。太陽の長期休暇だ。

青の月（八月）と恵みの月（九月）が休みになる太陽の長期休暇は、いつも騒がしい見習いたちを、余計に騒がしくさせた。彼らが耳を傾けるのは、師の人たちの講義ではなく、友人との休みの計画だった。

「俺、この前、岩羊に手綱をつけて乗ったぞ！ ちよつとだけど」

チャルーは鼻を鳴らして、定期的に岩羊乗りの成果を自慢した。岩羊競争が行われる主の祭りは、青の月のはじめに行われる。それが近づくにつれ、チャルーの熱気も強まった。

「すごいわね。ちよつとというのは、コオロギが一拍鳴いたくらい、というところかしら」

彼の熱さとしつこさにうんざりするリリは、イムサに負けず劣らずの毒舌を吐いた。チャルーは凶星だったのか、一瞬閉口したが、すかさずトルーヤが口をはさんだ。

「それだって難しいんだぞ！ 乗るのも半日かかることだってあるんだから！」

「こいつのことだ」ガルシュがトルーヤを指して、ぼそり、みんなに言う。

無論、それでは競争にならないだろうと、イムサが言いかけたが、クワレーンとオクルに肘で小突かれてやめた。

ある日の放課後、チャルーの言い分を確かめようと、3015番地の見習いたちは練習場へ向かった。オクルも来た。

「ファマエン師の授業で思ったんだ。岩羊の毛皮と糞を、集めて焼いて、投石器の弾を作ろうって。小型の魔法動物なら仕留められるんじゃないかな」彼は自分の発明を話した。

「なにか捕まえたら、あたしに見せて！ 殺さないでよ？」マウリンは興奮で鼻を鳴らし、オクルに何度も約束させた。

練習場は、実習棟の裏の森にあった。落雷がもとで森の一部がなくなり、いまは岩羊乗りの練習場所になっているのだという。周囲には木の柵がめぐらされ、安易にアベドが立ち入らないようになっていた。

クワレーンは、初めての岩羊に息をのんだ。背から流れる空色の毛皮は、ま

るで滝のようで、日の光を受けてきらきらと輝いていた。額から後ろへ反る二本の黒い角は、個体によって長さや捻じれが違い、個性を見せている。草をはもうと屈むたびに、豊かな毛が柔らかに揺れ、凜とした賢者の瞳は、仲間や小さな訪問者たちを油断なく観察していた。

チャルーを含む選手たちは、柵の外で体力作りをしていた。クワーレンたちはその間、雑草を引っこ抜き、岩羊の気を引こうとした。だが、一匹も来なかった。

六年の見習いが柵に入り始めた。喉の奥を広げて、名を呼ぶように、自分の岩羊を探している。岩羊は、それを理解しているのか、特定の見習いのほうへ向かっていった。彼らは、背を撫で、餌をやり、ようやく距離が縮まった頃に、岩羊に乗ることを許された。

「なんて尊大な生き物」リリは雑草を投げ捨てた。

「なあ、糞を集めてこないか」

飽きて、枝で地面をほじくっていたクワーレンのもとに、イムサがやってきて言った。

「ベロイユ師に糞の掃除を買って出よう。嫌な顔は、まずしないだろうさ」オクルもやってきた。

クワーレンは、楽しそうだと思い、彼らについていった。

話を聞いたベロイユ師は、怪訝な顔をした。

「賃金は出ないぞ？ それでもいいなら、岩羊が出払っている小屋を頼もう。

柵の中は、知らないアベドが入ると危険だから」

「終わったら、報酬として糞をもらっていいですか？」

イムサの質問に、ベロイユ師は眉をひそめ、口を開いた。長細いベロイユ師のぐんにやり曲がった顔に、少年たちはくすくす笑った。だが師は、迷惑にな

するようなことをしなければいいと、許してくれた。彼は、選手たちのことで頭がいっぱいだった。

三人は小屋へ行き、臭い暗闇へ足を踏み入れた。魔法学のファマエン師が言った通り、青い色をした糞がいたるところに転がっていた。

強烈な匂いに鼻をつまみながら、掻き出しの鍬を片手に、彼らは作業を開始した。途中、糞をつかってダブリエドをやった。エイネー語で汚泥転がしという意味のダブリエドは、主に草原で行われる競技だ。こぶし大の球を、棒を使って相手側の陣地に入れ、多く球を入れた側の勝利だ。

オクルは、「ダブリエドは、まじでこうやってはじまったのさ!」と、ゲラゲラ笑って最初に得点を入れた。実際、ダブリエドは、オクルの言う通り、糞遊びが発端だった。

小屋の掃除が半分くらい終わったところで、一年の練習がはじまった。三人は、小屋の入り口に立って見物した。一年の選手たちは、上級生を控えながら、鎧を使って乗っている。できない者も何人かいた。岩羊が前足を上げて追い払ったり、まず近づかなかったりしたのだ。

「あいつ、乗ってるぜ」

イムサが一人の選手を指さした。チャルーだ。手綱をしっかりと掴み、姿勢はぶれず、お調子者の顔は消え、毅然とした表情をしている。見習いたちは歓声を上げ、拍手を送った。チャルーはそれに、ひきつった笑顔で応えた。だが、

それはすぐに強張った。岩羊の歩みが、常歩なみあしから速歩はやあしに変わったのだ。

「おい、チャルー、落ち着け! 手綱を引け!」ベロイユ師が叫ぶ。

しかし、岩羊はさらに加速していった。チャルーは視界から消え、遠くで少女たちの悲鳴が上がった。瞬間、少年たちは小屋を飛び出した。

チャルーを乗せた岩羊は、柵を優雅に飛び越えていた。リリたちの隣を風の

ように駆けていく。ペロイユ師と選手たちが、わあわあ叫んで追いかけた。

「わあ、振り回されてんなあ！」

オクルは面白そうに言った。しかし、クワーレンとイムサは、あまり笑えなかった。

「チャルー、この間抜け！ 戻ってこい！」

イムサが叫んだが、岩羊とチャルーは森の中へ消えていった。ペロイユ師が岩羊用の笛を鳴らし、戻そうと追いかける。その後を、どたどたと他の選手たちがついて行く。

チャルーは、夕飯まで帰ってこなかった。

主の祭り当日の岩羊競争は、必ず見物すること。戻ってきたチャルーは、3015番地の仲間全員に、そう誓わせた。

「会場から風のように消えるところを見せてくれるんだな。楽しみだぜ」

イムサは言ったが、いまのチャルーにその皮肉は効かなかった。

「会場は高い壁で囲まれてるんだ。今回は柵を超えたけど、あの走りで掴んだ。今度は平気だ！」彼は唾を飛ばして、優勝宣言までした。

太陽の長期休暇まで、あと二日を切った頃。ミニユメが学舎に姿を見せた。彼女はこの日、午前中すべての授業に参加した。生物学、国語、天文学、それと歴史学。すべて。

「なんでいまさら来たの？ 後れを取り戻そうと、ようやく我に返ったわけ？」休み時間、同番地のラーリエが、ミニユメに突っかった。

「ああ、試験を飛ばすため？」と、合点したかのようにアシエキも言う。「利

口とは思えないけど」

席に座るミニユメは、じっと黙って前を向いている。ラーリエはため息をついて、桃茶の髪を振った。

ミニユメは、燃えるようなまなざしで二人を見送った。口の中で呟く。

「用が済んだらすぐに帰るし」

クワーレンは、そんな彼女と目が合い、慌ててそらした。

昼休み。中庭では、主の祭りに向けて、十数人の見習いたちが踊りの練習をしていた。クワーレンは、木陰で読書をしながら、本の向こうに見える踊りを見物した。いつのまにか、まわりに少年たちが集まって、たわいないお喋りを始める。

「『あっちゃこっちゃ、ぽっけった！ お前の向く向きお見通し！（エイネーでのあっち向いてほい）』……おっしや、勝った！ ペニヤツツ酒はお前のおごり！」

「見るよ。ベリタムのやつ、踊りがずれずれだぜ！」誰かが踊りをちやかしている。

ベリタムというやつの踊りを見てやろうと顔を上げると、向こうの木陰に灰色の髪が怪しく浮かんでいた。ミニユメだ。彼女は、クワーレンに向かって手招きした。

正直、ミニユメとこそ話しているところを誰かに見られたくなかった。話すなら、堂々とするべきだ。ミニユメの控えめな態度に、クワーレンは少しいらだちを覚えた。

「何？」

近づいたクワーレンは、会話するには少し遠い距離で立ち止まった。

「スエデンが、あんたについて聞きたいって。あたしが伝言を頼まれた」

腹の底から震えが昇ってきて、クワーレンはつばを飲み込んだ。ミニユメが影で話をしたかった理由はこれか。でも、アベドを嫌う竜人が、なぜ僕のことを聞きたがる？

「もしかして、今日学舎に来たのは、このため？」

「そうだね。褒めてくれていいよ。早めにすますつもりだったけど、あんた、意外と一人にならないんだもん。昼休みになっちゃった」

チャルーに言われたら頭にくるところだが、ミニユメに対してはならなかった。笑みに、隠れた憂愁があったからかもしれない。

「あんた、どこから来たのかって、聞いてくれて言われた。……どこ生まれ？」  
ミニユメは腕組をした。

「海生まれだけど」

「いつ生まれたの？」

「花の月（四月）」

「番地はどこ？」

「……3015……」

クワーレンは、だんだん居心地が悪くなった。

「ねえ、これってなんの意味があるの？」

「さあ。スエデンのことだし」

「まさか……復讐のために家を聞いている？」

クワーレンは、竜人を蹴飛ばしたことを思い出した。彼、まだ恨みをもっているのかも。

「それはない」

ミニユメの目は吊り上がった。

「……ねえ、あんた、スエデンを話の通じない化け物みたいに思ってるでしょ。

あいつ、強烈に頭がいいんだからね。あんたやあたしなんかより、何倍もわかってる？」

ミニユメの目は冷めていた。クワーレンの頬は熱くなった。

「夜中前には寝る？」

ミニユメは、また質問した。クワーレンは、警戒して顎を少し引いた。

「へーき。これが最後」

「後で理由を聞いてきてよ、スエデンに」

「……会えたらね。それで、答えは？」

クワーレンは、大体その時間は寝ていると言った。

「分かった。ありがと。さよなら」

クワーレンは、影から出てきてすれ違ったミニユメを振り返った。

「おい、どこに行くの？」

「決まってるじゃん。帰るんだよ」

「もう？ あと五限だけだよ」

「うん。でも、あたしの宿題は終わったもん」

クワーレンが何か言う前に、ミニユメは元気よく手を振った。

「いい太陽の長期休暇を！」

彼女は針葉樹の記念塔を通り過ぎ、兎のように茂みへ姿をくらました。その姿は、羨ましいほど生き生きとしていた。



そうして迎えた、太陽の長期休暇初日。

スエデンの真相はわからぬまま、クワーレンは、オクルとイムサのペニヤッ



ツ酒販売準備に協力していた。他の仲間たちは、『いっさいがっさい』に遊びに行っており、彼らは、無人となった3015番地の居間に集まっていた。

準備は、〈鼠商人〉の店に行き、安いホルトを買うところからはじまった。ペニヤツツ酒を注いで販売するためだ。

「しかも、売るのは、ただのペニヤツツ酒じゃないぜ？」オクルが言った。

「俺たちで味付けした限定ものだ」イムサが面白そうに頷く。

彼らが言うには、檸檬の汁と太陽葉という香料を入れ、ペニヤツツ酒をかさ増したそう。二人はこの特製ペニヤツツ酒を、皮肉を込めて『なかよしお日様味』と名付けた。

「おいしくて客もうれしい、稼げて俺たちもうれしい。だから、ちよつとのずるは関係なしだ。みんなお得で、みんななかよし。な？ 問題ないだろ？」オクルはにやにや笑った。

その日は、ホルトの購入と、『なかよしお日様味』の最終調整で終わった。クワレーンも味見をしたが、なかなかおいしかった。ずるい酸味と幻想的な香りが混ざった味だ。

最後にオクルは、「このホルトには、絵を描こうと思う」と言った。「見た目が購買意欲を高める。どんなにくそみたいな代物でも、見た目がよけりやあ、みんな買っちゃうのさ」

「絵なんか描きたくねえな」イムサが鼻にしわを寄せる。

「知ってる。お前は絵が下手だ。クワレーン、お前が描いてくれ」

「僕？」

「そうだ」オクルは頷いた。「おしやれなら何でもいい。とにかく、その辺で売ってるやつを参考に、柄を描くんだ。絵は得意だって、イムサから聞いたぜ？ 森の地図を描いているんだろ」

クワーレンは驚いた。部屋で描いてはいたが、誰にも言ったり見せたりしたことはなかったのだ。イムサは鼻を鳴らしてそっぽを向いた。「手には手の、左足には足の役割」彼はぶつぶつ呟く。

「……まあ、じゃあ、やってみるよ」

「そうこなくちゃ」オクルは、大きな手でばしんとクワーレンの背を叩いた。

その晩、クワーレンは描画帳を開き、石灯いしひから取り出した陽の瞳の光を頼りに、図案を考えた。線を引き、また線を引く。シルレイヤの木の模様だ。水の流れのような、細くて美しい模様……。

そのとき、白い坂道が浮かんた。アバルバン谷だ。空を指し示す崖。アケラスの竜、近くにそびえる木……。情景は次々と出てくる。

クワーレンの口が、勝手に動いた。「眠りのアベド……」

彼は、はっとして仲間の様子を窺った。チャルーもイムサも、もう眠っている。

急に気分が悪くなり、クワーレンは、描画帳を置いて、陽の瞳を石灯いしひの扉の中に戻すと、布団にもぐった。

なぜシルレイヤの模様で思い出すんだ。クワーレンは目をつむった。長い間隠してきたことが、蘇りつつある。それを押し戻すために、眠りに落ちることを願った。



「早く来い」

「早く来い」

がさついた低い声が響いている。クワーレンはシルレイヤの森を歩いていた。生ぬるい風が頬を撫でる。

ふと、見覚えのある景色に、彼は立ち止まった。自分が転げ落ちた、あの傾斜が見えてきたのだ。ちらつく木漏れ日、瞬きする巨大な黄色い目玉。

クワーレンは後ずさった。様々な青が星屑のようにきらめいている。影となっている腹や翼の内側は、凍てつく夜空のようだ。夜空をまとう生き物は、歯を剥いた。黄色い目は三日月のように細くなった。

「遅かったじゃないか。眠るまでずっと待っていた。お前、夜の真ん中を過ぎたな。この嘘つき」

「え、なんだって？」

スエデンは答える代わりに、大きな翼を打ち下ろして飛んできた。

「お前、あれから何度か森に来たな。なぜだ！」竜人は少年の胸ぐらを掴んだ。

「やつめろ！」

クワーレンは、竜人を引きはがそうと彼の肩を掴んだ。「君とは喧嘩したくない！ ミニユメにも、怒られるからな」

ぱっと竜人が離れた。クワーレンは、痛む喉元を抑えて身を起こした。スエデンは苛立たし気に頭を振っていた。

「お前は、ミニユメの仲間か？ 本当の仲間か」

「……仲間だと僕は思っているけど、彼女がどう思っているかは知らない」

「都合よく立ち回ろうとする奴だな、お前は」

スエデンは振り返った。「そうか、お前は無責任なやつなのか。だからシルレイヤたちが噂しているんだな」

クワーレンが反論する前に、スエデンは歯ぎしりして迫った。

「シルレイヤはお前を知っているぞ。お前が森に来る、もっと前から。きっと監視していたんだ。だが、そのせいで拷問にかけられている。『クワーレン』と言って、シルレイヤが噂話をすると、皮かぶりのやつらがシルレイヤたちに、『もっと話を』って絞るんだ」

困惑していると、スエデンが先に言った。

「皮かぶりは、お前を長く探してる連中だ」

「僕、まだなにも……」

「言わなくてもわかる。お前の考えは聞こえる。ここはお前の〈黄身<sup>シラ</sup>〉だからだ」

竜人は、口角を上げ恐ろしい形相をした。クワーレンは、彼を引っ搔いてやりたくなった。それを、スエデンはすぐに悟った。

「やればいいさ。だいたいアベドはそうだ。『お飾り頭族』って呼ばれているのを聞いたことないか？ 頭はあるのに理性がない、頭脳はただの飾りだっていうことだよ。これは南方の窯吹き族や、縞尾族、黒砂の民たちが使っている」

「でたらめだ。そんなやつら、聞いたことないよ。アベドは、そいつらのこと、気にする価値もないって思ったんじゃない？」

竜人はあざ笑い、苦しそうに痰を吐いた。

「南方の連中がそれを聞けば、宣戦布告ととるだろう。そうして争いは絶え間なく続くのだ」

「なにしに来たんだよ」

スエデンが相手だと、どうも喧嘩腰になる。きっと、彼が挑発的だからだ。

竜人は、アベドの少年を噛み殺したくて仕方がない、というように、がらがらと喉を鳴らし、歯をかみ合わせた。

「お前の愚かさで、森は死ぬ、と言いに来たんだ。シルレイヤは、毎晩悲鳴を上げる。お前を守るためだ。少しでも使える脳みそをもっているなら、二度とシルレイヤの森に立ち入るな」

「僕がそれで納得すると思う？ 皮かぶりや、拷問について、君が知っていることはほかにもあるだろう」

クワーレンは一呼吸置いた。スエデンの調子に流されそうになる。彼はさっき、ここを〈黄身<sup>シラ</sup>〉と呼んだ。〈黄身<sup>シラ</sup>〉については、クワーレンもフアマエン師の授業で何度か聞いた。全ての存在が持つ個人的な部屋のようなもので、夜になると〈内世界〉に浮上し、開放的になるのだそうだ。〈黄身<sup>シラ</sup>〉は、そこで起こる捻じれの風景を夢として見せる。だが、〈現〉と〈内世界〉のはざまにいるそのとき、〈黄身<sup>シラ</sup>〉は魔法動物に侵入されやすい。魔法動物は、そうして寄生虫のように宿主を蝕んでいくのだ。それが、憑りつかれた、と呼ばれる現象だ、と。

「俺が好んでお前に憑りつきに来たと、本気で思っているのか？」竜人は吐くように言った。

堪忍袋の尾が切れた。

「思っていることが、全部じゃないんだよ」

クワーレンは集中して、あることを想像した。とたん、地面が二つに割れ、腕となって伸びた。竜人は驚いて飛びあがり、捕まえようと襲い掛かる泥の腕から逃げ続けた。

「ここは僕の〈黄身<sup>シラ</sup>〉だ！ 気に入らないなら出て行けよ！」

攻防戦はしばらく続いた。風が吹き荒れ、夢の太陽は姿を消し、暗雲が立ちこめた。木は枝を突き上げ、蝙蝠のように舞う竜人へ、葉を網のように広げた。

竜人は、だが、いつも完璧に先を読んだ。クワーレンが裏をかこうとしても、彼はその裏をかいた。

はじめに疲れを見せたのはクワーレンだった。彼は、どっと尻もちをつき、疲労と眠気により、夢の中であるのに、一度夢を見た。「起きろ、ルードルの砂糖がもうすぐ見習いだ！」とチャルーに平手打ちされる夢だった。

目を開けると、まだシルレイヤの森の夢だった。遠くでスエデンが座り込んでいる。彼も疲れたようで、翼が呼吸で上下していた。肩を震わせ、目は空を見ている。

「……スエデン？」

聞こえていなかった。竜人は、見えない檻にとらわれたかのように静止し、振動していた。

心配して近づくと、足首が埋まった。沼だ。膝から腰、腰から肩へと、どんどん沈んでいく。

「スエデン、僕を殺すつもりか！ 助けて！」

スエデンはずっと震えていた。そこに恐怖があると気づいたとき、クワーレンの目に泥がかぶり、なにも見えなくなった。

大歓声が耳を割り、頭痛が痛い。いいや、歓声ではない。話し声、悲鳴などが何百、何千にもなって重なっているのだ。

森の中で自分は独りぼっちだった。アベドの生き残りは、自分だけだ。他は、南方の一族に食べられてしまった。切り取られたアベドの手首は、一族の首にぶら下げられ、護符として高値で売られているらしい。

「君を育てたピ克蘭タは、いいアベドだったよ」

何千と騒ぐ声の一つがそう教える。シルレイヤの木だ。

「僕は、ピクランタの顔を見たことがないよ」

言うと、シルレイヤは答える。「癖毛でねえ、蝶々結びが出来ないけど、優しいアベドで……」

「ところで、南方の一族の少年が、一人、また森に入ったよ」

あるシルレイヤが噂すると、他のシルレイヤたちは騒ぎ出した。

「なんだって？」

「名前はクワーレン」

「クワーレン？ 皮かぶりが探している子だ」

「たしか、あの子は一度、仲間が守った子だよ」

クワーレンは、歯ぎしりした。

「そっちのクワーレンは放っておけよ。どうして僕らアベドを助けなかったんだ？」

「シルレイヤは見捨てない。助けない。大いなる約束に従っているだけ」

「その約束の中に、僕らは入っていなかったのか！」クワーレンはシルレイヤを殴った。「騒いでばかりの木め！ 滅んでしまえ！」

「竜人の子、お前は先が見える。私たちは、根っこで感じる。星を取り巻く、自分たち以上の存在を。私たちは、それに従って運動しているだけだ」

「皮かぶりが来たよ」シルレイヤの一本がつぶやく。

「運動の中では、意味が存在しない。見捨てること、助けること。そこに意味はない。小さな者はその事実冷酷さを見て嘆き悲しむが、スエデン、先を見る能のある君なら、わかるはず。クワーレンも運動の一部だと。そして、君も運動の一部だ。誰か一人が重役を担っているわけではない。すべての運動が一所ろいになって、はじめて先が作られるんだ。そして、そこに意味はない。た

だ起こるだけ。君がミニユメと出会って、友となったことも。裏切りではない、悩むこともない。ただ起こったこと。そうだろう？」

「皮かぶりが来たよ」

「僕の運動は、なんだっていうんだ？」クワーレンは、スエデンの声で話した。

「クワーレンに、森へ入らないよう伝えて」

「皮かぶりが来るよ」

「やつらは、彼を探している」

「皮かぶりがいるよ」

「やつらは、彼の手を切り取るだろうから。やつらは、彼の名前を消すだろうから。誰からも、二度と思い出されないように」

耳をつんざくような悲鳴が聞こえ、周囲に燻した木の匂いが充満した。シルレイヤたちはどろりと溶けていき、最後に灰色の枝一本が残った。

クワーレンは枝を拾い上げ、大事に隠しへ入れた。すると、目の前に誰かが立った。

「出ていけ」

スエデンだった。「ここは俺の〈黄身<sup>シラ</sup>〉だ」

「好きで来たんじゃないよ」

「……知っている」

とたん、全身にびりびりと痛みが走り、後ろへ押し出される感覚があった。背中を打ち付けたその地は、白い崖の上だった。

「お前の〈黄身<sup>シラ</sup>〉だ。なにか言おうとしているぞ」

スエデンが足元に立って、周りを見渡していた。照りつける太陽が鱗を堅く光らせ、そよぐ風は竜人の紺色の髪を逆立てている。



クワールレンは、震えながら身を起こした。

「ここ、嫌な場所だ。ねえ、皮かぶりのことを教えてよ」

「皮かぶりは、俺も風も知らん。シルレイヤによれば、姿がないという」

スエデンの調子は、さっきよりも勢いを失っていた。クワールレンから距離を置き、翼を後方へ下げている。

「見ようとすれば、たちまち視界が奪われる。それが皮かぶりと呼ばれている理由だ」スエデンは淡々と言った。「お前、覚えはないのか」

途端、崖の先端に、何者かの影が立った。

クワールレンは恐怖で息を飲み込んだ。眠りのアベドだ。慌てて側の木陰に隠れる。木肌は水のような感触。模様も水流のようだ。スエデンの姿は、いつのまにか消えていた。

「ナツシュ……」

遠くで自分を呼ぶ声がする。丸っこく小さな手で幹を掴みながら、ナツシュは、眠りのアベドを見ていることしかできなかった。記憶の舞台は、容赦なく展開された。

眠りのアベドは、二人いた。二人の眠りのアベドは、アケラスの竜を指し、なにかを話している。やがて、彼らはぬるりと振り返り、ナツシュをその目にとらえた。

眠りのアベドの一人が片腕を上げ、振り下ろした。一瞬、言葉が聞こえた。

意味はわからなかった。ただ光が失われ、ナツシュは失神した。

何かが欠けた。

淀みがその隙間に入り込み、吐き気を生んだ。

永遠とも思える長い時間が過ぎた。ナツシュは言葉を、光を、色を、感情を思い出せなかった。ただ独りで震えていた。

そこへ、何者か突っ込んできた。まるで清流だ。流れは籠を編み、ナツシュを抱いた。小さな子どもは、目の開かない雛のように、打ち震えていた。

「忘れなさい、小さな子。太陽はすぐそばに、水は内側に、草木はあなたを守り、風が影を流していく」

ナツシュは、ようやく薄目を開けることができた。銀色の大木が、自分を抱えていた。木漏れ日が宝石のように零れ落ち、頬を温める。

「……シルレイヤ？」

か細く彼は訊ねた。シルレイヤは、大きな葉を振動させ、鈴のような音を響かせた。

「あなたを守った。私は、あなたを守った」

シルレイヤのざわめきは、深い安堵をもたらした。ナツシュは、恐怖で凍りついた内側が溶け、涙となって流れるのを感じた。

「まだ立てるよ、歩けるよ。行っておいで」

シルレイヤは、柔らかにナツシュの体を地へ転がした。

まどろみが消えた。

誰かの呼び声で目が覚めた。坂の麓から一人のアベドが駆けてくる。ナツシュは、シルレイヤの木が側にいるのを感じた。見上げると、水の流れを刻む美しい銀色の幹が、ナツシュの背後を守っていた。

「ナツシュ！ どうした、何してる？」

癖毛を乱しながら、そのアベドはやってきた。ナツシュは、目に涙をためた。ピクランタだ。

「おい、何、して……ふう、崖、勝手に、行く、危ない、じゃないか」ピクラ

ンタは息を切らす。

「まだ、いる？ あいつら……」

ナツシュの問いに、ピクランタは、きょんとした。だが、すぐに納得した顔になった。

「もういないさ。さあ、ナツシュ……、保育部屋に帰ろう」

ピクランタは、手を差し伸べた。

空を掴み、クワーレンは目を開けた。星々がゆっくりと回り、潤んだクワーレンの黒目に砂粒の光を落とした。彼は身を起こした。

足元に、胡坐をかくスエデンがいた。クワーレンはそっぽを向いた。

「アベドはなぜ泣く？ 非効率的だ。無防備になるじゃないか」

「知らないよ」

満月のような竜人の瞳は、夜闇に光っていた。

「お前は、皮かぶりを知っていたな。嘘をついたのか？」

「思い出したくなかったんだ。アバルバン谷のことは、なにもかも」

「なぜ」

「あれで全部失くしたからだよ。友達、信頼。そこから作られる楽しい思い出なんかを」

あけぼのや、蜘蛛のことを思い出し、苦い憎悪が湧いた。けれど、シルレイヤの清流のなごりが、それを遠くへやった。クワーレンは、平坦な気持ちに戻った。

「シルレイヤのことは、本当に忘れていた。気づいてもいなかったのかも。け

れど、〈黄身<sup>シラ</sup>〉は覚えていた」

だから、たびたび生活の中で蘇ったのだ。シルレイヤは、確実に僕を守り、守護者として側に居続けてくれたのだ。

「だが、そのシルレイヤは死んだ」

スエデンが、がさついた声でつぶやいた。

「アバルバン谷のシルレイヤは、もう一本もないっていう話だ。拷問を受け、見せしめに焼き殺されたんだ」

頭を殴られた気がした。さっきまで側にいた存在が、黒くなって消えていく様子が、まざまざと浮かんだ。

「なんでだよ！」クワールレンは叫んだ。「助けてくれたのに、なんで焼かれなくちやいけないんだ！」

どうどうと、森が揺れた。地面がひび割れ、いく本もの木が倒れる。遠雷がとどろき、稲妻が空を駆けた。

スエデンは、揺れから逃れるように宙へ飛んだ。

「眠りのアベドはどこにいるんだ」クワールレンは熱い息を漏らした。「正体を暴いてやる！ 僕がそいつを焼く！」

「お前が敵うわけないだろ。シルレイヤを消しているやつだ。そいつらは、お前も消そうと探しているんだぞ。それがどういうことか、わかっているのか」

竜人は舌打ちした。

吹き荒れていた風が、少しずつやんだ。

「わかったか、アベドの小僧」

「君は、相手の〈黄身<sup>シラ</sup>〉を見て、その先を知ることができるかと本にあった。僕の先はどうなる？ 眠りのアベド―皮かぶりのやつらに報復できる？ それと

も、シルレイヤと同じように、死んじゃうの？」

スエデンは、ぐるっと黄色い目を回した。

「それを知ってどうなる。お前は行動を変えるか？ そうしたら、先も変わる。簡単には教えられる。だが、報復は多くの場合、成功しない。連鎖するからだ。死も、必ず訪れる。だから、今日ではないと言い切れない」

竜人は地面に降り立ち、クワーレンの瞳を凝視した。

「だが、確率で話すなら、お前が森に近づかない限り、お前の死も近づかないだろう。シルレイヤを想うなら、それが得策だ」

クワーレンはそこで、スエデンの瞳に、自分の姿を見た。厭悪に燃えて歪む顔、恐怖による冷たい振動。まるでスエデンだ。どうやら、自分たちは共通点があるみたいだ。スエデンも、きっと同じものを見ているのだろう。彼には傷がある。そして自分にも。

「眠りのアベドが、僕を探す理由は、憎しみ？ それとも、他に理由が？」

「さあな。だが、復讐ではないだろう。やつらはナッシュュではなく、クワーレンを探しているからな。その名前が、やつらを引き寄せているのかもしれない。シルレイヤも興味を持っていたし」

クワーレンは、耳元で血が脈打つのを感じた。スエデンの縦に切れた瞳孔が、さらに狭まる。荒れる風が、紺の髪を乱す。

「また会うだろう。生きていたらな、互いに」

竜人スエデンは後ずさると、矢のように飛び去っていった。

星々が回り、白くなった月が沈み始めた。



体中が痛かった。まな板にのせられ、めん棒でたたきにされたかのような。  
おまけに頭痛と眠気までする。起きたばかりなのに。

ふらふらと階段を降り、洗面所にむかったクワーレンは、夢が事実だったことを知った。スエデンが胸ぐらを掴んだときにできた、赤いひっかき傷があったのだ。クワーレンは慌てて見習い服に着替え、襟を立てた。

村の中心部に楽団が来るということで、その日はみんなで中心部へ向かった。クワーレンは寝なおしたい気分だったが、長期休暇二日目を潰したくなかった。「見て……、主の舞の試験だよ！」

甲高いマウリンの声が頭に刺さる。見れば、中心部の手前で、見習いたちが円を描いて踊っていた。ギュグリンブ師をはじめとする師の人たちも、そろって見物している。

ズイード  
「子役を決めるんだわ」リリが言った。

主の舞は、主の祭りの最終日にある催しだった。各仕事人からアベドが一人選出され、『エイネー叙事詩』にある魔法動物に扮して舞う伝統行事だ。開催場所は王都のエイリアル城前で、毎年、多くのアベドが詰めかける。

そんな主の舞の踊り手になると、手を挙げる見習いは少くない。見習い

の役は、初代女王エイネンナムが渡島して、はじめて会った子どもたちで、子

ズイード  
と呼ばれた。子に選出されれば、見習いのみならず、仕事人からも注目され

る。名誉と尊厳が一気に勝ち取れるこの機会は、目立ちたがりにとっての特別舞台だった。規定では五年生以上から選出され、選抜試験は四つの学舎と合同で行われた。それが、いま行われている試験だ。

「誰になると思う？」

エネーリスがクワーレンに耳打ちした。「あの見習いなんか、特にうまいかも」

クワーレンは、だが、<sup>ズイド</sup>子が誰になろうとどうでもよかった。燃えるシルレイヤや、首から下がるピクランタの手、眠りのアベドのことを思い、吐き気がした。

中心部の楽団は、すでに演奏を始めていて、多くの見習いたちを集めていた。鮮やかな橙色に塗られた台に、演奏家のつくりの人たちが、楽器を手に身をゆすっている。見習いたちは、音楽に合わせて踊り狂っていた。甲高い笛に、低い弦楽器がせわしなく音を刻む。それに皮の太鼓が混ざり、見習いたちの気持ちを高まらせた。

これに体を動かされない見習いはいなかった。けれど、クワーレンは違った。彼は、トルーヤとガルシュが体をぶつけてこようと、オクルが、「ホルトの図案はできたか？」と肩を叩いてこようと、少女たちが、「あんたの踊り、酔ったイカみたい！」とチャルーをからかおうと、くたびれた笑いを浮かべることしかできなかった。

興奮、乱舞、歓喜、まるで狂気。太鼓の奏者が手を挙げ、拍子を取りはじめる。見習いたちも、喜んで手を打つ。クワーレンも、しかたなく手を打った。

「どうかしたの？」エネーリスが声をかけてきた。

「なに？ なにもないよ」

「腐った鯖みたいになってるわ」

「暑いからかな。僕、暑いのが苦手なんだよ」

クワーレンは示すように額をぬぐう。エネーリスは可笑しそうに笑い、踊りに戻った。

彼女には、スエデンのことを話してもいいはずだった。しかし、問題は眠りのアベドが絡んでいることだ。奴らが僕を探していることを、なんて説明すればいい。自分でもよくわかっていないのに。下手に話せば、太陽に頭を焼かれたおかしなやつと思われるだろう。

クワーレンは、黙って友人たちの踊りを眺めた。汗の滲む腕から、急に寒気が這い上ってきた。